

敦賀市指定文化財 9 冊の「社記」は、現社人平松確太郎（平松周定 氣比神宮
大中臣魚取朝臣）の 6 代前に当たる（平松家 5 代目）平松周家個人が書いたも
ので、その祖は大中臣魚取朝臣である。

氣比神宮祝官として大中臣朝臣魚取公 776 年から平松周定（確太郎）1957
年まで 1180 年平成の現代まで約 2000 年間続く家柄である。

敦賀に一番先に入ったのが平松の先祖であると当家に言い伝えがある。

氣比神社（平松家）

- 1 代目 大宮司大中臣朝臣 平松美作守景吉 慶長元年（1596 年）
妻（正室）朝倉義景息女（姫）細川晴元の娘（孫になる）
- 2 代目 大祝大宮司大中臣朝臣 平松家吉 （1645 年）
妻（正室）河端氏 （後室）瓜生 氏
- 3 代目 副祝禰宜 大中臣朝臣 平松家富
妻（正室）瓜生 氏
- 4 代目 禰宜 大中臣朝臣 平松富親
妻（正室）？
- 5 代目 大祝大宮司從五位下大仲臣朝臣 平松周家（1701 年～1773 年）
社記 9 冊を書く（敦賀市指定文化財）
妻（正室）河端かな子
- 6 代目 副祝禰宜大中臣朝臣 平松周敬
妻（正室）田邊津恵子
- 7 代目 副祝 大中臣朝臣 平松周忠
妻（正室）山中利代
- 8 代目 副祝 大仲臣朝臣 平松周茂
妻（正室）石倉紀伊子
- 9 代目 大中臣朝臣 平松周玄（周茂長男）文政 12 年 6 月 15 日生
妻（正室）井上氏利佐女
- 10 代目 大中臣朝臣 平松周儀（周玄長男齋一郎）喜永 6 年 8 月 11 日生
妻（正室）佐野りょう 昭和 6 年 9 月 22 日帰靈 79 歳
- 11 代目 大中臣朝臣 平松周定（齋一郎長男確太郎）明治 12 年 12 月 14 日生
79 歳帰靈
妻（正室）河端みち
- 12 代目 平松 巖 明治 38 年 8 月 2 日生（確太郎長男）平成 12 年 4 月
帰靈 94 歳
妻（正室）平松美津子平成 17 年 1 月 31 日帰靈 93 歳

13代目 平松周祥 昭和13年7月5日生(巖 長男)平成15年1月3日
帰靈64歳
河端 護 金ヶ崎神社神主(確太郎 4男)平成19年11月13日帰靈97歳

当家は、代々長男のみが母屋で食事・教育・礼儀や道德等を別格に教えられ、代々、長男に口伝えで平松家の歴史を教育されて来たものと教わっている。又、代々嫁に来るときに一緒に乳母が居た様である。父(巖 12代目)にも乳母がいて私が物心つくころまで何時も賢い乳母がいて父の表情を全て読み取っていた事を記憶している。周祥(巖長男 兄)も何歳までか定かではないが母家で育ったと聞いている。幼き頃、誰なのかが不思議で母に訪ねたことがある、父が呼び捨てにしている理由が大きくなってから理解することができた。父の兄弟は9人いて父以外は母(祖母)のもとで育てられたようで、やはり兄弟の中では父だけが特別扱いされ、食事は勿論全てに違っていたようで、兄弟の中でも父に対する反感はあったようだ。また祖母が年老いて病気に成った時、真冬に桃が食べたいと言うと取り寄せて絞って口に入れると、父の顔を見た途端、お茶碗を投げ捨てた様で、やはり自分で育ててないの他の兄弟とは可愛さが違うようだったと母が悲しそうな顔で話してくれたことを覚えている。祖母も川端家のお嬢様で祖母が亡くなるまで牛乳代が河端家の実家から出ていたと聞いている。父は兄弟思いだったが、今に思えば孤独な人だったと思う。祖祖母(佐野りょう 10代目斎一郎の正室)が家に泥棒が入って来た時のこと、着物にタスキ掛け、頭に鉢巻をして、薙刀を持ち、構えた姿が障子に映った影を見て、泥棒が一目散に逃げた話を聞いている。(薙刀の名手だったようだ)小浜の出と聞いているがお姫様だった様だ。家事の事は一切しなかったと聞いているが厳格であったようだ。こんな厳粛な所へ来た母は大変だったと思うが、父の乳母が影になり日向になりしてくれたのだろう、母は乳母をととても大切にしていた。物の無い時に色々心配りをしていたのを覚えている。